

二集 歴代宝案 目録 上

康熙三十六年より起こし  
嘉慶十八年に至る

宝案を督抄する記<sup>(1)</sup>

雍正四年丙午二月二十四日、再び紫金大夫程順則・長史蔡用弼・程允升の令を承けて、康熙三十六年より雍正五年に至るまでを抄し、宝案の二集を成す。共に十六本と作り、内の一本は目録なり

宝案を督抄するもの

正議大夫 曾 曆 砂辺親雲上<sup>(7)</sup>

鄭秉彝<sup>(8)</sup> 大嶺親雲上<sup>(9)</sup>

中議大夫 蔡文河 喜瀬親雲上<sup>(10)</sup>

金 震 安次嶺親雲上<sup>(11)</sup>

都通事 金 声 手登根里之子親雲上<sup>(12)</sup>

蔡 壩 喜友名里之子親雲上<sup>(13)</sup>

筆帖式<sup>(14)</sup>

遏達理位 蔡文海 高良里之子親雲上<sup>(15)</sup>

阮為標 天久里之子親雲上<sup>(16)</sup>

副通事 毛日盛 奥間里之子親雲上<sup>(17)</sup>

梁 經 国吉里之子親雲上<sup>(18)</sup>

蔡宏謨 久高里之子親雲上<sup>(19)</sup>

鄭師谷 登川里主<sup>(20)</sup>

鄭秉和 与那嶺里之子<sup>(21)</sup>

蔡元鳳 大田里主<sup>(22)</sup>

梁 煌 当間里主<sup>(23)</sup>

陳弘訓 松堂通事<sup>(24)</sup>

周大猷 富村通事<sup>(25)</sup>

生員<sup>(26)</sup>  
金 安 安次嶺秀才

陳昌言 仲本秀才<sup>(27)</sup>

阮則北 儀保秀才<sup>(28)</sup>

陳以桂 幸喜秀才<sup>(29)</sup>

鄭 謨 宇地原秀才<sup>(30)</sup>

金 節 手登根秀才<sup>(31)</sup>

阮超叙 真玉橋秀才<sup>(32)</sup>

毛廷憲 奥間秀才<sup>(33)</sup>

雍正七年己酉（一七二九）十二月吉日

長史 蔡其棟 具志親雲上<sup>(34)</sup>

長史 陳以栢 幸喜親雲上<sup>(35)</sup>

注\*以下の注にある人名で『家譜』にみられるものは、その頁を記した。

久米村の位階については主に『大百科』によったが、他に池宮正治・小渡清孝・田名真之編『久米村―歴史と人物』（ひるぎ社、一九九三年。以下『久米村』と略称する）を参照のこと。

(1) 督抄 抄は筆写すること。督抄は文書の筆写等の作業を監督・

統括して「宝案」の二集を編集すること。

- (2) 紫金大夫 久米村の最高の位階名で、称号は親方。紫の帕をかぶるところに由来する。品秩は従二品、三司官座敷に陞ると正二品になる(『久米村』二二三四頁)。

- (3) 程順則 一六六三—一七三四年。久米村程氏(名護家)七世。

名護親方。紫金大夫加銜法司正卿(三司官座敷)。五度清に渡り、初期の二回には通算七年福建に滞在して勉強し、帰国後、王世子・世孫の教師を勤め、のちには上級教育機関である明倫堂の設置を建議したほか、『十七史』や『六論衍義』を將來した。

一方、江戸への慶賀使にも随行し、新井白石と会見を重ねて『南島志』の資料を提供した。著作に、航海の指導書『指南広義』のほか、詩文集に『雪堂燕遊草』その他がある(『家譜』(二)『四五頁])。

- (4) 長史 十七世紀前半まで進貢の役職名であるが、のち久米村の行政に専任するようになった(『久米村』二二五頁)。久米村総役を補佐して進貢・冊封に関する事務、久米村に関する一切の公務を監督する。

- (5) 蔡用弼 生没年不詳。久米村蔡氏。湖城親方。のち紫金大夫に陞る(『家譜』(二)『三三三頁、周之佐の譜ほか])。

- (6) 程允升 一六九四—一七二九年。もとの名は搏霄。久米村程氏(名護家)八世。順則の子。名護里之子親雲上。都通事。雍正七年、北京に赴く途次に山東臨清州で死去(『家譜』(二)『五六〇頁])。

- (7) 正議大夫 久米村の官位で、進貢のさい進貢副使になる役職(『大百科』正議大夫、久米村の位階・役職、『久米村』二二—五頁など参照)。

- (8) 曾曆 曆の字禁止により信と改む。一六七七一—一七四六年。久米村曾氏(仲宗根家)七世。砂辺親方。紫金大夫。進貢のために二度、慶賀と進貢のために一度渡清のほか、江戸上りにも随行した(『家譜』(二)『三九五頁])。

- (9) 親雲上 敬称や職名、役職などに由来する王府における称号の一つで、親方、親雲上、里之子、筑登之、という序列。親雲上の品位は正三品—従七品で、親雲上、里之子親雲上、筑登之親雲上、の三つのランクがある。

- (10) 鄭秉彝 生没年不詳。久米村鄭氏。のち紫金大夫に陞る(『家譜』(二)『八一頁、金振の譜ほか])。

- (11) 中議大夫 久米村の位階で正議大夫と都通事の間に位する。一六八〇年に始まる(『大百科』)。

- (12) 蔡文河 一六八三—一七五〇年。久米村蔡氏(仲井真家)十一世。仲井真親方。紫金大夫。勉強および進貢のため渡清四回(『家譜』(二)『三二五頁])。

- (13) 金震 生没年不詳。久米村金氏(安次嶺家)十世。安次嶺親方(『氏集』)。

- (14) 都通事 久米村の官位。中議大夫の下に位し、進貢のさいは進貢都通事の役をつとめる(『大百科』)。

- (15) 金声 一六八四—一七四六年。久米村金氏(阿波連家)十一世(『家譜』(二)『七九頁])。

- (16) 蔡埔 一六八七—一七四八年。校訂本では蔡庸とするも目録乾坤本及び家譜により正す。久米村蔡氏(上原家)十二世。総官、都通事、正議大夫などとして五度渡清。申口座に陞り崎原親雲上を称する(『家譜』(二)『三四〇頁])。

- (17) 筆帖式 書記。もと満州語で字を写す人の意味。清制では満漢

章奏の文籍を翻訳することを掌り各官庁に属していたが、この職名を琉球で用いたもの。久米村の官職としての筆帖式については『久米村』二五―六頁を参照。

(18) 遏達理位 あたいかん 当官か。ここでは担当者ほどの意か。

(19) 蔡文海 生没年不詳。久米村蔡氏十一世、蔡応瑞の五子。同じく蔡応瑞の四子蔡文河の弟(『氏集』)。

(20) 阮為標 生没年不詳。久米村阮氏六世、与古田親方(『氏集』)。

(21) 毛日盛 生没年不詳。久米村毛氏(吉川家)四世(『氏集』)。三世都通事毛文英の三男として名があり、既に家譜を分かつ、とする(『家譜』(一)『七三三頁])。

(22) 梁経 一六九六―一七二八年。久米村梁氏(国吉家)十一世。

(23) 国吉里之子親雲上。通事(『家譜』(一)『八〇三頁])。

(23) 蔡宏諱 生没年不詳。久米村蔡氏(武寫家)十二世。我謝親方(『家譜』(一)『九四四頁])。

(24) 鄭師谷 一六九九―一七四八年。久米村鄭氏(登川家)十四世。

登川通事(『家譜』(一)『六〇六頁])。

(25) 里之子 王府における称号の一つ。品位は正八品・従八品。

(26) 梁煌 一七〇二―一七一年。久米村梁氏(上江洲家)十一世。正議大夫、久米村総役となる(『家譜』(一)『七九二頁])。

(27) 陳弘訓 一七〇四―一七七年。久米村陳氏(真栄平家)四世。正議大夫(『家譜』(一)『四七二頁])。

(28) 通事 久米村の官位・役職。久米村では二十歳になるとはじめて通事の位を得て、その後は進貢・接貢の通事(通詞)役などを経て都通事へ昇進する(『大百科』)。

(29) 周大猷 一七〇三―一七三二年。久米村周氏(阿賀嶺家)四世。正議大夫(『家譜』(一)『三八二頁])。

(30) 生員 ここでは秀才のこと。秀才は久米村の位階の一つで品外。男子は十歳前後で若秀才となり、十四―十六歳で「かたかしら」を結うと秀才になる(『大百科』)。

(31) 陳昌言 一七〇五―一七四三年。久米村陳氏(仲本家)十一世(『家譜』(一)『四九三頁])。

(32) 陳以桂 一七〇五―一七五三年。久米村陳氏(幸喜家)四世。幸喜通事親雲上(『家譜』(一)『四六一頁])。

(33) 金節 一七〇七―一七五五年。久米村金氏(阿波連家)十二世。正議大夫(『家譜』(一)『八三頁])。

(34) 阮超叙 一七〇八―一七七一年。久米村阮氏(小渡家)六世。小渡親雲上。『中山世譜』の筆者も勤めた(『氏集』、阮氏家譜)。

(35) 蔡其棟 一六九三―一七四一年。久米村蔡氏(具志家)十二世。具志親雲上。接貢存留通事、進貢都通事などとして四度渡清。乾隆五年進貢正議大夫のとき福州で没した(『家譜』(一)『三〇九頁])。